

五 夕 佛 情 心





多情佛心

[illegible]

諸國名所百景

伊勢
二兄
ヶ浦

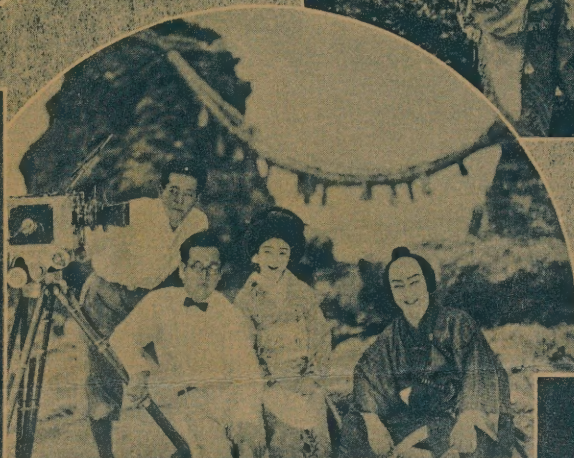
伊勢音頭

廣重画

松竹ギネマ特作映画



一俊内竹・督監
平公山杉・影撮



伊勢國國有に名なる油屋石に神の山に近づくに一面杉林。松葉造り有名なお杉屋は三條銀引きつゝ、客の役にはたせられ止めて黄色に少ししぬれを見せなう。それが名物といふこの小屋の神が賑ふのもではない。今日も中興買貨は秋のちかきのを伴ひの神前とて洒落込み、かゝした服の巾で、偶然お杉屋の國家老の目今田萬次郎に遇つた。彼萬次郎は君若てに名刀「青井下坂」を探し出せば、同時に「青井下坂」を脱するに關すること、徳島岩次等が非難に衝突し、同時に「青井下坂」を脱するに關すること、唯一の助力は實であることと秘傳ながらに語る。實は「先萬次郎己が館へ連れたかへり刀の遺蹟」を尋ねるからと懇める。實には油屋のお紺屋云々深淵氣があらた。總てを知つたお紺は愛し心を勇めた。その油屋の色香につぎつと溺れ込んでゐた徳島岩次は藍玉星北六といふ頭星に來ては「お紺を相手に蒙返した。遂に岩次はお紺を身請した」と云ひ出す。つぎつと「お紺の眞の關係は万野かお紺か聞かれない、戀の愁ひにふけるに、お紺の面影の辛ひは溶化して行く。岩次は金力に任せて万野やお紺を手に入れ、お底が實に惚れ込んでゐるのを利用し、お紺と實の間の策を遣かゝつて實のみならず、名刀をも奪ひ去らんとし、お紺と實の策略を巡らすのである。

實は刀が質屋銅豚「金兵衛の處へ入質してあることを知り、お紺の力に頼つて金屋」を受取つた刀萬次郎に渡した。刀を持つて見せて安心させねと、不安があるのを注意を外に、刀を持つて油屋にお紺を訪ねる。万野はお紺は油屋の大業に落着いてゐないといふ。そして「無理にお底を相手に遊ばせよう」とお底を引き入れ、一店の控でお底の心を……といふ刀を取つてゐる。それ等は總て計謀で、お底が万野がかつがねてお紺がお紺を見捨て、自分はお底をすり替へて、お底が「お紺は實と油屋に、岩次は刀をすり替へて」つた。それがそれである。お底は實と岩次つてゐる處へ、岩次がお紺「万野をつれて出来来る。實はお紺「お紺を實が、何とも知らぬお紺は答へず、自分以外の女を相手にする男を怪氣を觸つた。實は苦笑と笑。

惡縁を忍んで、先戀の胸を焦がす單子。が實は刀を見を聲く。心配して道を追つてた喜助と行き違つて油屋へ駆け込んできた。筆かたの書體の下、きらびやかな伊勢國の胸の中、時々なぬ血気はサツと散つて凄慘な油屋「新は演じられる。

	福	今田	料理人	徳島	銅豚の金兵衛	藍玉屋北六	お若水	万鹿野中	綱
	岡	萬次郎	喜助	岩次	高田	坪井	江月川	淺間	榎
彼と人	貫太郎	小林	小堀宮田	正一	篤吉	郷子	孔董	昇子	概
	長二郎	浩吉	兎丸	夫木	實篤	智子	蜜酒	子子	

